

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15H03471

研究課題名(和文)近代化前後の日本におけるリテラシーの基盤的再編成に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Fundamental Reorganization of Literacy in Japan Before and After Modernization

研究代表者

大戸 安弘(OHTO, YASUHIRO)

横浜国立大学・教育学部・名誉教授

研究者番号：90160556

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,900,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀後期の近代化が、日本人のリテラシーをめぐる意識と実態との変化にいかにか投影されたのかについて明らかにすることを課題とした。

前近代社会における民衆層のリテラシー能力の有効性についての具体的な事例を提示することにより、これまで課題とされてきた個別具体的な事例のさらなる積み重ねを行った。社会変動との関係性の解明もなされた。一方、近代化に伴う学校制度導入と浸透が、リテラシーの学びの内実にもたらした変化の様相について、その側面の一端を明らかにし、前近代のあり方の基盤部分を引き継ぎつつも、相当な修正がみられたことを指摘した。

以上の成果は、次年度に出版する見込みである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

前近代社会における日本人のリテラシー能力については相当な研究蓄積があり、その水準の高さと民衆レベルまでの深い浸透状況について論じられ、国際的な視点からみても卓越した状況にあるとされてきたが、問題は、その捉え方の根拠が状況的なものであり、概括的であるということであった。

本研究では、その隘路を切り開くべく、これまでの共同研究の成果を引き継ぎながら、地域性を意識しつつ個別具体的な事例の提示をかなりの程度に進めることに成功した。また、19世紀後期の近代化に伴う学校制度導入というインパクトが、リテラシー形成のあり様にもたらした、変容の足跡についても一定程度明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify how modernization in the latter half of the 19th century was projected on changes in the consciousness and reality of Japanese literacy.

By presenting concrete examples of the effectiveness of the literacy ability of the populace in pre-modern society, we have further accumulated individual concrete examples, which have been issues so far. The relationship with social change was also clarified. On the other hand, the introduction and penetration of the school system accompanying modernization has revealed a part of the aspect of the change that has brought about the reality of the learning of literacy, and while taking over the foundation of the pre-modern way, a considerable correction has been made. We pointed out what was seen.

The above results are expected to be published in the next fiscal year.

研究分野：日本教育史

キーワード：リテラシー 書字 学文 識字

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究に取り組む前段階として、現在の科学研究メンバーのうち6名の共同研究の成果として、大戸安弘・八嶽友広編『識字と学びの社会史-日本におけるリテラシーの諸相-』（思文閣出版、2014）を刊行している。同書は、日本における識字の歴史に関する初の本格的な研究書であり、それまで断片的に論じられてきた識字の歴史的展開過程が、初めて実証的に検討されることになったが、同時に、そこから新たな課題が浮上してきた。

そのひとつは、リテラシーを考える場合に、識字の基盤となる書字システムそのものの変容過程が非常に重要であるということである。その際に識字能力が実際に教育あるいは使用される場面におけるリテラシーの実態を検討の対象とすることの重要性も認識されてきた。このような実際の場面において、近世的なりテラシーの在り方がかなり長期的に継続してきたといえるからである。これは、教科書やカリキュラムのような、いわばリテラシー形成の公式的な側面を主な対象としてきた従来の教育史研究が見落としてきたものである。

ふたつ目は、近代的なりテラシーを可能とする、より現実的な土台がどのようにして実現したのかという問題である。具体的には、近代以降に就学することによって減少し、消失する子どもの労働力の代替を、社会はどのようにして獲得したのかということである。このような労働の巨大な再編成なしには、現実的にはマス・リテラシーが可能となることはあり得なかったはずである。

労働から就学へという、子どもの生活全般に及ぶ再編成は、いわば人間形成の基盤的な再編成の過程となるものである。本研究の意図は、近代化前後のリテラシーの変容過程を、従来の教育史の枠を越えて、人間形成の基盤的再編成の過程とも関連させて捉えようという、巨視的な視点からの新たなアプローチを背景にして成立している。

### 2. 研究の目的

近代化前後の日本におけるリテラシーの基盤的再編成過程を明らかにしようとする研究目的は、次のような三つの観点から構成され、それぞれの観点に即した調査研究によって進められた。(1)リテラシーそのものの基盤となる書字システム全体の再編過程の研究。具体的には、字体・書体・文体・書字実践（文字仕様の実際が、いかなる道具を用いてどのように為されていたか）の変容過程を明らかにする。(2)リテラシーを可能とする現実的基盤の再編成過程に関する研究。具体的には、包括的リテラシー（誰もが読み書きできる状態）の基盤となる、就学を可能とする労働過程の再編成（子ども労働の消失に対して社会はいかに対応したか）の解明。(3)日常生活における書字から学文による文化的権威の形成に至るまでの近世的リテラシーの近代以降における変容過程の解明。

### 3. 研究の方法

#### (1)人間形成基盤の基盤的再編成過程に関する実証的研究

近代化の過程は、識字力の包括的普及をはじめとする近代的なりテラシーの成立をもたらしたが、それは近世的なりテラシーの改変だけでなく、人間形成の基盤となる構造そのものの改変なしには実現しえないものであった。リテラシーと人間形成過程のこの相補的な変容の過程は、人間形成に関する歴史上において、もっとも大きな出来事であったと言ってよい。それは、子ども期の人間形成を労働から学校へと移動させることによって成し遂げられたものであるが、具体的には、子ども期の離脱による労働過程そのものの再編成（子ども労働力の漸次的消失とその代替）、子ども期のための特別な生活時間（＝学校生活）の普遍化、学校が作り出す諸能力の社会的普及という三つの側面によって成り立つものであった。を実現するためにのごとき措置が強制的に実施されたのであったが、それは、に示す労働そのものの転換がなければ可能とはならないものであった。このような問題に関する在来の研究は一定程度存在するが、それらは総じて、いかにして人々を就学へと導いたかという、学校の側からの立場によるものという制約を有する。これに対して本研究では、子ども労働力の漸次的消失という事態を労働世界がいかに受け止めて言ったのかという側面をも含みこむ、より広い視野からの研究を進めることとなった。それは、就学が普遍化していく前提条件を解明する上で本来不可欠な作業であり、近代化以降における新しいリテラシーを実現する土台となる部分について照射しようとしたものである。

#### (2)リテラシーの継承と変容

上述の人間形成基盤的再編成を土台として、リテラシーの再編成がなされるわけであるが、実際には、近世期までに構築されたリテラシーの基盤、すなわち書字や文書作成の在り方などは即座に転換しえるものではなく、生活や労働をはじめとする社会全体において、その後も長く続いていくこととなる。近代化以降におけるリテラシーの変容を捉える場合には、したがって、このような近世的なりテラシーと近代化の過程で作り出されようとしていたリテラシーとが相克をなす状況が解明されなければならない。そこからは、字体・書体・文体・書字実践などの観点からのアプローチが導き出され、実際に文字を記し文書を作成する過程が分析されなければならない。しかし、これらは、いわばリテラシーの基盤となる部分と言えるが、このような基盤部分の具体的な変容過程については、在来の研究ではほとんど論じられていないのであり、重要な課題として残されたままである。そこで本研究では、近世的なりテラシーの継承

と変容の過程について、学校教育と労働過程の両場面における具体的な書字の状態についての検討を加えることとした。リテラシーが実際に機能する場面は、会社や役所をはじめとする労働の場面であり、これらを見放しては、その社会におけるリテラシーの全容を捉えることは到底できないからである。

### (3) リテラシーと文化的威信の変容

リテラシーがもたらす社会的な効果の一つとして文化的な威信の問題がある。在来の研究では「文化的中間層」の存在として指摘されているが、これはリテラシーがもたらす文化的威信の近世的な在り方を示したものである。このような近世的な在り方が、明治期以降においてもなお根強く継続していくものであるが、本研究では、このような近世的なリテラシーの在り方が、学校がもたらすことになる新しい文化的威信とどのように重なり合っていくことによって、どのようにして変容を遂げていくことになるのか否かについての検討も進めることとした。

## 4. 研究成果

(1) 前近代から近代へと社会のあり方が大きく移行していく過程という長期的なタイムスパンにおいて位置付けながら、それぞれの時代の識字状況を捉えていくために照射すべき課題に取り組むという姿勢を維持することを前提にした。また、その際には、従前からの我々の共同研究の基底にあった地域性と個性性と重視という、従来の識字の歴史的研究を乗り越えるために求められる特質を堅持することとした。こうした立場から多様な課題にアプローチし、史料制約から従来の研究ではなかなか光が当てられなかった問題において、相当程度の進展がみられたという成果もあった。日本の識字状況の史的解明については、今後も具体的な状況を一一つ提示していくことが求められていることに変わりがないが、今期の研究成果を総じてみれば、以下のような特徴を示すことができる。

(2) 前近代の時間的範囲は非常に長く、その時間的厚みの基底の部分というべき古代・中世におけるリテラシー形成の具体相に迫ることはなかなか容易ではないが、12世紀後半の平安後期の貴族の家、撰関家に伝えられた故実作法の相伝の経緯について明らかにすることができた。故実作法は、口頭伝達や身体所作による直接的な教訓が必要であり、平安貴族のリテラシー継承の問題として捉えることができるのであるが、これまでは政治史的な観点からの解明がなされる傾向が強かったといえる。これに対して、九条兼実による日記『玉葉』を分析することを通して、撰関家の家督としての理想像が、和漢の典籍を渉獵し、文章や詩句に秀で、音楽の道を究め、和歌を嗜み、政道に明らかな姿にあったことを確認するとともに、そうしたあり方を確実に後代に伝えるために、日記にそのために必要なプロセスを記録したことも確認することができた。九条家としての子女の計画的育成とその先例化の意図を読み取ることができたのであるが、こうした営為には、「家」の分立化が進んだ同時代の傾向が反映されたものでもあった。

(3) 近世社会において文字が御家流を中心に全国共通化し、さらに文字使用が不可避的に組み込まれたことによって「文字社会」とみられる状況が生まれた。17世紀日本はそうした状況を成立させたといえる。こうした社会にあって、民衆への文字文化の普及・浸透と文字学習の機会拡大が民衆の生活に大きな影響を及ぼしていくことになったのであるが、そうした具体的な生活レベルでの影響についての実態解明を、井原西鶴の文学作品において試みるということも行った。17世紀後半の民衆生活が描写されている作品が多いのであるが、町人物を中心に武家物なども含めて、文字文化の普及と読み書き能力の形成、そして諸芸の獲得の状況を見た上で、遊女をめぐる具体的な識字状況を捉えることにも傾注した。西鶴の初期作品の好色物といわれる一連の作品には、当時の京都、大坂、江戸の遊里を中心として展開された男女の生き様が描かれている。そのなかで遊女の教養形成の側面に目を向けると、中世から17世紀初中期に活躍した太夫と称される遊女が、十分な識字力は勿論のこと貴族主義的な教養を蓄積し、遊里で遊ぶ客である男性の教養に対応しようとしていたこと、またそうしたことの持つ意味についても論じ、そのことの切実さについても迫った。

(4) 近世の社会変革を志向した動きということが出来る「一揆・騒動・世直し」は、中世の前身を引き継ぎながら、近世初頭から幕末期に至るまでの間に、規模は多様であるとしても、間断することなく続き、全国に夥しい数量を以って展開された。そして、そこには近世の文字文化やリテラシーが重要な役割を果たしていたと思われるのだが、これまでの研究史においては十分な検討がなされてきたとはいえなかった。そうした状況を切り拓くための試みとして、19世紀後期の幕末期の房総地方九十九里地方に展開された真忠組一件を巡る状況に着目した。真忠組一件とは、攘夷実行と九十九里地方の民衆の生活困窮の打開とを結合させることを意図し、それを実際化しようとした運動である。しかも構想に留まることなく具体的な運動の立ち上げにまで結実させたという点で、同種の動向の中で際立った存在であった。この運動は、九十九里浜の漁村に開かれた一手習塾を拠点として始動し、そしてそこから生じた地域の人々の繋がりを媒介にしてその基盤が形成され、やがて幕藩制社会に強い衝撃を与えるほどの大きな拡がりを持つに至った。その運動の中心人物である楠音次郎の手習師匠としての足跡に注目しながら、経験豊かな手習師匠であった楠が、どう時代を生き抜くために必要なリテラシーを伝える

教育活動の展開から、同業の手習師匠や村医者などを巻き込みつつ周辺への働きかけ進めたことが同調者を多く生み出すことに結実する過程を論証した。この動きは、やがてその後の房総地方での社会変革への確実な動きへと変容していくことになる。リテラシーの継承が社会の動向との相即の関係を築いていく典型的な事例の一つとして、画期となる意味を包含する現象を提示した。

(5)近代学校の創設が象徴というべき近代化の過程が進みゆくなかで、従前の社会において必須の能力として位置付けられてきた近世的なリテラシーのあり方が、なおも根強く人々の生活の基盤部分に浸透し、相当な時間的経過を経てゆくまで、その影響力が及んでいくことはたしかである。近代から現代への転換期にも生き続けている可能性も考えるべきであろう。こうした大きな時代の転換期のリテラシーの質の具体相についての検討も進めた。事例としては、明治10年から31年までの比較的長期にわたる指示状況調査を行なった滋賀県での試みを対象とした。明治期には、岡山県、鹿児島県、群馬県、青森県なども調査を行なっているが、滋賀県の調査が際立っていた。識字状況の調査といっても、「自己の姓名を記し得る者」についての調査である「自署率調査」である。しかし、郡レベルまで含めて丁寧な調査が行われ、『滋賀県学事年報』に纏められていたことに現れているような調査体制の充実はのみならず、そこに示されている自署率の数量の高さは注目に値する。明治10年の段階で、男子は90%近くの人々が自署できるとの結果が示されているからである。女子も40%近くの人々が自署できると捉えられていたことから、10年余り遡る幕末期の同地方の識字状況まで推測が可能となる数量を確認することができた。ただし、このことは他県にも通じるものではなく、例えば鹿児島県の状況と比較すると、滋賀県のような状況が均質に全国に広がっていたとはいえず、地域差がかなりあることも同時に意識しなければならないこともわかった。また、自署率調査の結果が示す状況は、公文書の作成や漢籍などの読書などというレベルから、仮名主体の文書や書物の水準がせいぜいというレベルなど、多様な側面を含み混んでいることも指摘しておかなければならない。

(6)近代学校の活動が、子どもの生活の基本状況として機能していくことになる時代の子どものリテラシーの内実へのアプローチも行われた。具体的には、字体・書体・文体・書字実践などの注目するアプローチが導き出され、実際に文字を記し文書を作成する過程の分析を行なった。戦前期の子どもの「読む」、「書く」という行為を形作った諸条件の一つである小学校の教科書に用いられた字体と活字の変遷を検討し、子どもがどのような文字を読み、書くことが求められたのかという観点から、近代日本の識字環境の一側面に光を当てた。維新に伴う政治体制の刷新、近代学校制度の導入とともに、子どもが習得する文字は、行・草・楷の三つの書体となった。他方、社会に流通する文字は、印刷された明朝体活字が一般的となった。手書き文字と読む・見る文字とが分離していった。同時に明朝体も字形が変遷した上、それ以外の字体も現れ、活字は手書き文字から遊離していった。この研究では、子どもたちの「見る」「読む」文字と、「書く」文字とを巡る政策方針や議論を、教科書で使用される字形の整理過程という観点から検討し、今日まで使用されている教科書体活字が考案されるまでの字体整理の過程と、「読む」こと、「見る」ことに比重を置いた教科書体活字作成のねらいを明らかにした。

(7)はじめに示した、これまでの共同研究の成果である2014年刊行の著書の内容を海外へと発信することも大きな課題として取り組んできたが、その道筋に見通しがついたことも記しておきたい。古代・中世・近世にわたる日本の前近代社会の識字状況に力点を置いた成果であり、前近代の史料を豊富に引用していることから翻訳には相当な困難が伴ったのであるが、海外の研究者との緊密な協力関係から、問題点を乗り越えた結果として、2021年夏頃にはイギリスのAnthem Pressから出版の予定である。今後は、海外の研究者との共同研究も進め、新たな視点から日本の識字状況へ迫ることも課題としていくこととしたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|   |                    |
|---|--------------------|
| 1. 著者名<br>大戸安弘                                | 4. 巻<br>9          |
| 2. 論文標題<br>幕末期九十九里地方における手習師匠と「世直し」－真忠組一件を通して－ | 5. 発行年<br>2019年    |
| 3. 雑誌名<br>日本教育史学会紀要                           | 6. 最初と最後の頁<br>1-31 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                 | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難        | 国際共著<br>-          |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>木村政伸                         | 4. 巻<br>86-1        |
| 2. 論文標題<br>民衆が文字を書き読む近世社会の特質 文字社会の視点から | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>教育学研究                        | 6. 最初と最後の頁<br>27-38 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>木村政伸                         | 4. 巻<br>10         |
| 2. 論文標題<br>一七世紀における遊女の教養形成と文字文化        | 5. 発行年<br>2020年    |
| 3. 雑誌名<br>日本教育史学会紀要                    | 6. 最初と最後の頁<br>1-18 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-          |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>池田雅則                             | 4. 巻<br>10          |
| 2. 論文標題<br>明治期における判任文官の任用 森林官吏の特別任用制度に着目して | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>日本教育史学会紀要                        | 6. 最初と最後の頁<br>41-63 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし              | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難     | 国際共著<br>-           |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>池田雅則                         | 4. 巻<br>27         |
| 2. 論文標題<br>明治期における判任警察官吏の任用と求められた能力    | 5. 発行年<br>2020年    |
| 3. 雑誌名<br>兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要       | 6. 最初と最後の頁<br>1-23 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-          |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>八鍬友広                         | 4. 巻<br>45            |
| 2. 論文標題<br>識字の歴史研究と教育史                 | 5. 発行年<br>2018年       |
| 3. 雑誌名<br>東北教育哲学教育史学会紀要『教育思想』          | 6. 最初と最後の頁<br>199-219 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>太田素子                         | 4. 巻<br>36            |
| 2. 論文標題<br>近世社会の子ども 子返しと捨て子の子育て意識と社会背景 | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>総合女性史学会『総合女性史研究』             | 6. 最初と最後の頁<br>111-113 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>鈴木理恵                         | 4. 巻<br>64          |
| 2. 論文標題<br>蔵春園の教育活動                    | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>『教育学研究紀要 (CD-ROM版)』          | 6. 最初と最後の頁<br>84-89 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>太田素子                         | 4. 巻<br>12            |
| 2. 論文標題<br>子育ての歴史と現在 17世紀から21世紀へ       | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>『和光大学現代人間学部紀要』               | 6. 最初と最後の頁<br>226-236 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>柏木敦                          | 4. 巻<br>7             |
| 2. 論文標題<br>府県学務官招集に関する研究(1)            | 5. 発行年<br>2018年       |
| 3. 雑誌名<br>『教育学論集』                      | 6. 最初と最後の頁<br>11 - 26 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>柏木敦                                      | 4. 巻<br>12         |
| 2. 論文標題<br>戦前期小学校教科書における字体および活字の変遷－活字と手書きとの統一をめぐる－ | 5. 発行年<br>2017年    |
| 3. 雑誌名<br>教育史フォーラム                                 | 6. 最初と最後の頁<br>1-21 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                     | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難             | 国際共著<br>-          |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>太田素子                                 | 4. 巻<br>12          |
| 2. 論文標題<br>家と村の子育て からの離陸－幕末維新时期における子育て・保育の改革構想 | 5. 発行年<br>2017年     |
| 3. 雑誌名<br>幼児教育史研究                              | 6. 最初と最後の頁<br>43-58 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                 | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難         | 国際共著<br>-           |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>八鍬友広                         | 4. 巻<br>45            |
| 2. 論文標題<br>識字の歴史研究と教育史                 | 5. 発行年<br>2018年       |
| 3. 雑誌名<br>東北教育哲学教育史学会紀要『教育思想』          | 6. 最初と最後の頁<br>199-219 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|  |                      |
|--|----------------------|
| 1. 著者名<br>木村政伸                         | 4. 巻<br>20           |
| 2. 論文標題<br>西鶴作品にみる17世紀後期の識字能力と教養の形成    | 5. 発行年<br>2018年      |
| 3. 雑誌名<br>九州大学大学院教育学研究紀要               | 6. 最初と最後の頁<br>95-109 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-            |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>八鍬友広                         | 4. 巻<br>第64巻第2号    |
| 2. 論文標題<br>明治期滋賀県における自書率調査             | 5. 発行年<br>2016年    |
| 3. 雑誌名<br>東北大学大学院教育学研究科『研究年報』          | 6. 最初と最後の頁<br>1-18 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-          |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>木村政伸   | 4. 巻<br>第8巻1号       |
| 2. 論文標題<br>宗教的情操および道徳性の形成における非文字メディアの活用ーイエズス会のキリスト教布教戦略ー | 5. 発行年<br>2015年     |
| 3. 雑誌名<br>新潟大学教育学部紀要 人文・社会科学編                            | 6. 最初と最後の頁<br>13-24 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし                           | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                   | 国際共著<br>-           |



|  |                   |
|--|-------------------|
| 1. 著者名<br>柏木敦                          | 4. 巻<br>第41号      |
| 2. 論文標題<br>学校教育における画一性と任意性             | 5. 発行年<br>2015年   |
| 3. 雑誌名<br>教育学論集                        | 6. 最初と最後の頁<br>1-8 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無        |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-         |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>鈴木理恵                         | 4. 巻<br>第6巻        |
| 2. 論文標題<br>撰閲家の教訓                      | 5. 発行年<br>2016年    |
| 3. 雑誌名<br>日本教育史学会紀要                    | 6. 最初と最後の頁<br>1-19 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>有         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-          |

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>軽部勝一郎                                  |
| 2. 発表標題<br>小学簡易科をめぐる示される地域のニーズ 第一次小学校令期の岩手県を事例として |
| 3. 学会等名<br>全国地方教育史学会第42回大会シンポジウム (招待講演)           |
| 4. 発表年<br>2019年                                   |

|                                |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名<br>大戸安弘                |
| 2. 発表標題<br>19世紀後期における手習師匠と社会変動 |
| 3. 学会等名<br>日本教育史学会第631回例会      |
| 4. 発表年<br>2019年                |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>池田雅則                        |
| 2. 発表標題<br>「履歴史料」より覗き見る近代日本人の学びとキャリア形成 |
| 3. 学会等名<br>日本教育学会第75回大会                |
| 4. 発表年<br>2016年                        |

〔図書〕 計10件

|                                      |                 |
|--------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>太田素子                       | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>エイデル研究所                    | 5. 総ページ数<br>10  |
| 3. 書名<br>教育・保育の過去現在未来を結ぶ論点 汐見稔幸とその周辺 |                 |

|                            |                 |
|----------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>川村肇              | 4. 発行年<br>2018年 |
| 2. 出版社<br>清水書院             | 5. 総ページ数<br>112 |
| 3. 書名<br>読み書きは人の生き方をどう変えた? |                 |

|                                  |                 |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>池田雅則                   | 4. 発行年<br>2018年 |
| 2. 出版社<br>梓出版社                   | 5. 総ページ数<br>92  |
| 3. 書名<br>明治前期中学校形成史 府県別編(4) 北陸東海 |                 |

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>軽部勝一郎                                 | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>北大路書房                                 | 5. 総ページ数<br>12  |
| 3. 書名<br>子ども 学がひらく子どもの未来 子どもを学び, 子どもに学び, 子どもと学ぶ |                 |

|                                  |                 |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>大戸安弘、鈴木理恵、木村政伸、川村肇、柏木敦 | 4. 発行年<br>2018年 |
| 2. 出版社<br>六花出版                   | 5. 総ページ数<br>46  |
| 3. 書名<br>教育史研究の最前線               |                 |

|                                    |                 |
|------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>八鍬友広                     | 4. 発行年<br>2017年 |
| 2. 出版社<br>勉誠出版                     | 5. 総ページ数<br>561 |
| 3. 書名<br>日本「文」学史 第二冊 「文」と人々ー継承と断絶ー |                 |

|                                  |                 |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>八鍬友広                   | 4. 発行年<br>2017年 |
| 2. 出版社<br>吉川弘文館                  | 5. 総ページ数<br>194 |
| 3. 書名<br>闘いを記憶する百姓たちー江戸時代の裁判学習帳ー |                 |

|                                 |                 |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>八鍬友広                  | 4. 発行年<br>2016年 |
| 2. 出版社<br>有志舎                   | 5. 総ページ数<br>274 |
| 3. 書名<br>講座明治維新 第10巻 明治維新と思想・社会 |                 |

|                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>八鍬友広、鈴木理恵 | 4. 発行年<br>2015年 |
| 2. 出版社<br>平凡社       | 5. 総ページ数<br>60  |
| 3. 書名<br>書籍文化とその基底  |                 |

|                                  |                 |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>川村肇、大間敏行、軽部勝一郎         | 4. 発行年<br>2016年 |
| 2. 出版社<br>東京大学出版会                | 5. 総ページ数<br>91  |
| 3. 書名<br>就学告論と近代教育の形成 勸奨の論理と学校創設 |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                        | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                     | 備考 |
|-------|--|---|----|
| 研究分担者 | 柏木 敦<br><br>(KASHIWAGI Atsusi)<br><br>(00297756) | 大阪市立大学・大学院文学研究科・教授<br><br><br>(24402)     |    |
| 研究分担者 | 大間 敏行<br><br>(DAIMA Toshiyuki)<br><br>(00595390) | 近畿大学九州短期大学・通信教育部保育科・講師<br><br><br>(47110) |    |

## 6. 研究組織（つづき）

|       | 氏名<br>(研究者番号)                                | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)       | 備考 |
|-------|--|-----------------------------|----|
| 研究分担者 | 軽部 勝一郎<br>(KARUBE Katsuichiro)<br>(30441893) | 甲南女子大学・人間科学部・准教授<br>(34507) |    |
| 研究分担者 | 天野 晴子<br>(AMANO Haruko)<br>(50299905)        | 日本女子大学・家政学部・教授<br>(32670)   |    |
| 研究分担者 | 川村 肇<br>(KAWMURA Hajime)<br>(60240892)       | 獨協大学・国際教養学部・教授<br>(32406)   |    |
| 研究分担者 | 池田 雅則<br>(IKEDA Masanori)<br>(60609783)      | 兵庫県立大学・看護学部・教授<br>(24506)   |    |
| 研究分担者 | 木村 政伸<br>(KIMURA Masanobu)<br>(70195379)     | 九州大学・基幹教育院・教授<br>(17102)    |    |
| 研究分担者 | 八鍬 友広<br>(YAKUWA Tomohiro)<br>(80212273)     | 東北大学・教育学研究科・教授<br>(11301)   |    |
| 研究分担者 | 鈴木 理恵<br>(SUZUKI Rie)<br>(80216465)          | 広島大学・教育学研究科・教授<br>(15401)   |    |
| 研究分担者 | 太田 素子<br>(OTA Motoko)<br>(80299867)          | 和光大学・現代人間学部・名誉教授<br>(32688) |    |